

連続ドラマ 作品タイトル

# 『夏の月』

8月31日、私の初恋は、なかったことになる。  
私の記憶からも。

## 〈企画概要〉

研究が大好きで、自然や宇宙などいろいろな事に興味津々なソラ。  
何でも自分で調べてしまうソラだが、『恋』だけはまだ知らない。

ある日、家の近くの竹藪に墜落した緑色の光を追って行くと、  
不思議な美青年・カグヤと出会う。

地球について学ぶために月から来たというカグヤと、  
カグヤを研究したいソラ。

お互いを研究し合うことを決め、共に時間を過ごすことになる。  
初めはただの研究対象だったカグヤに、少しずつ惹かれていくソラ。

.....しかしカグヤには、大きな秘密があった。  
それは8/31に月へ帰る事、  
そして最後は、自分との記憶を、彼女の中から消さないといけない。

これは宝物のようなひと夏の恋を描く、令和版「竹取物語」

たとえ記憶から消える恋だったとしても、  
あなたは相手をお愛することが出来ますか？

# 企画のポイント

## ①令和の時代に描く「竹取物語」で、 世界に通用するドラマへ。

日本人には馴染み深い古典名作「竹取物語」。近年では故・高畑勲監督が「かぐや姫の物語」として取り上げ、国内だけでなく世界からも注目を集めました。

今回はかぐや姫を祖母にもつカグヤが地球を訪れるというユニークな設定にし、名作を現代版にアップデートした、新鮮さと現代性を与えた新しい純愛物語となるでしょう。

## ②絶対に叶わない、記憶にも残らない、 それでも恋をしてしまう切なさ。

14歳の少女に訪れたのは、初めての、そして運命の恋。普段は自然の中を駆け回り、研究ばかりしている恋に無頓着だったソラ。そんな彼女が、はじめての恋心に戸惑いながらも、勇気を出して一歩ずつ進んでいく姿を、私たちは応援したくなるでしょう。

## ③「カグヤ」というキャラクターで、 女性視聴者をキュンキュンさせます。

かぐや姫なのに、『男』である今回の竹取物語。彼はKPOPアイドルのような見た目のTHE・美男子だが、宇宙人なのに人間より情緒があったり、古典に詳しくったりと古風な魅力を持ち合わせる。和歌が好き、自然が好きで、花を見て「いとおかし」と涙する。そんな地球人のイケメンとは違う、一癖二癖もある月のイケメンが、女性視聴者を魅了します。

主人公たちの恋の行方から目が離せない  
毎週必ず1度はキュンとするドラマをご提案します！

# 登場人物紹介

## 前園ソラ（14）

種子島に住む中学3年生の女の子。  
「研究」が大好き。図鑑がバイブル。  
自然、生物、宇宙、と様々な理系分野に興味がある。  
なんでも物知りなソラが唯一知らないことがあった。

それは、恋。恋愛ものが出てくる古典では赤点を取る始末。  
父親はロケットの事故で他界。母親はJAXAの職員。

---

## カグヤ（？）

月の王族（月棲人）。祖母がカグヤ姫。絶世の美男子。  
地球人について学ぶために地球へやって来た。カグヤが月へ帰る時は、地球で知り合った人々の記憶からカグヤが消える。写真からも姿は消える。かぐや姫が伝えた日本文化が月に広まった影響で古典文化だけは習得している。

髪の毛と右腕は緑色。睡眠時や動揺した時だけはマリモ姿になったり、所々地球人らしからぬ箇所がある。

## 前園春（38）

ソラの母親。  
夫を亡くしながら仕事と子育てを両立してきたスーパーウーマン。  
JAXAに所属。  
過度に人に関わることはせずクールな性格だが、娘は溺愛。服装に興味がない。

## 三宅美沙（29）

春の妹。美容師。姉と違ってミーハー。  
姉とソラは変人だと思っているが、自分の芯がある点をリスペクトしている。  
春が家にいない間、たまにソラの世話をしにきてくれる

## 上木スティーブン五郎（36）

JAXAに派遣された上席研究員。その正体は昔かぐや姫に会った帝。原作では不老不死の薬は断ったと書いてあるが、実際は薬を飲んで死なない身体を手に入れた。この終わらない命を終わらせるべく、カグヤのような「月棲人」の研究に生涯を捧げている。

## 中松心美（ここみ）（14）

ソラの幼い頃からの親友。流行に敏感でアイドルが好き。  
勉強は全くで出来ないが、明るい性格からとにかく異性からモテる。

## 前園賢（35）

ソラの父親。過去ロケット事故で亡くなっている。  
研究オタクで、今のソラの原型を作ったような人。  
サバサバした春とは真逆で、人垂らしで、季節の情緒などを大切にしていた。

# 夏の月 全体構成

## メインキャラクター

前園宇宙(14) 鹿仙中学校3年生。  
カグヤ (?) 月から来た宇宙人。  
中松心美(14) ソラのクラスメイト。  
前園春 (38) ソラの母。JAXA職員。  
三宅美沙(29) 春の妹。美容師。  
笹野修介(35) 理科教師。ソラの担任。  
持田麻弥(42) 国語教師。  
前園賢 (35) ソラの父。亡くなっている。  
上木スティーブン五郎(36) JAXAに派遣された上席研究員。その正体は昔かぐや姫に会った帝。「月棲人」の研究に人生を賭けている。

## 第1話: #私の自由研究

### #1 私の自由研究

鹿仙中学校に通うソラは「研究」が大好き。自然、生物、宇宙、と様々な理系分野に興味があり、知識も大学教授が舌を巻くレベル。しかしそんな何でも物知りなソラに、唯一知らないことがあった。それは、恋。理系分野はテストで満点だけれども、恋愛についての問いが出てくる古典では赤点を取る始末。母親はJAXAの職員で今はロケット発射プロジェクトで家をあけていた。そんなソラは、夏休みの自由研究を何にしようか、クラスでたった一人、真剣に悩んでいる。「朝顔の研究」「天体観測」どのテーマを選んでも、すでに答えが出ている幼稚なものばかり。そんな中、地球に墜落した発光する緑の物体を追いかけていくと、ソラは不思議な青年・カグヤと出会う。研究好きのソラにとって念願の宇宙人！カグヤを研究すればノーベル賞を取れるかもと、カグヤを自由研究のテーマに決めるソラだったが...

## 第2話: #恋人って何？

美紗にカグヤを目撃されたソラは、咄嗟に「恋人」と嘘をつく。男を家に泊めているのかと呆れる美紗だが、あの研究一筋の変人な姪が恋に目覚めたことを純粹に喜び「不健全な事は絶対しない事」と約束させ、カグヤを泊めるのを許可してくれた。美紗に監視される中、恋人らしく振る舞わないと焦るソラ。カグヤは辞書や本を読み漁り「恋人について調べた」とノートにまとめたリスト

を見せる。「①友達に紹介②お揃いアイテム③見つめ合う④手を繋ぐ」等が書いてある。こんなの無理！と拒むソラだが、「地球人を研究したい」とカグヤに頼まれ、しぶしぶ協力することに。心美にカグヤを紹介したり、ペアアイテムを買ったり、見つめ合ったり。最後、カグヤがソラの手を繋ぐ。胸が高鳴り、鼓動が速くなり、初めての感覚に戸惑うソラ。「ソラ、何か感じるか」と尋ねるカグヤに対して「...別に」と強がるソラ。しかしそれではカグヤの研究のためにならないと思い直し「心拍数と体温上昇、あと胸が痛い」と症状を説明。「それは興味深い」と笑うカグヤにキュンとなるソラ。

一方JAXAの会議室では、種子島の竹藪で目撃された『謎の緑の球体』について緊急会議が行われている。上木の口から「月棲人」という言葉が出て……。

### 第3話: #カグヤの秘密

カグヤとソラが本当にカップルなのかと疑う心美は、Wデートを持ちかける。美紗は初めてデートするソラのために、カグヤの髪を切り、服を選んで変身させる。デート当日、芸能人並にキラキラしたカグヤが登場。心美の連れてきた彼氏・大和は対抗心を燃やす。カグヤに勝とうとして、心美の目を盗んでソラを口説く大和。「心美の彼氏なのに最低！」とソラが拒否すると、大和は豹変。ソラに乱暴しようとするところをカグヤが助けてくれる。助ける際、人間離れた能力を使う姿を大和に見られてしまったカグヤ。カグヤは大和のおでこに手を当て、一連の記憶を消した。「今、何したの...？」と尋ねるソラに「僕は人間から記憶を消す能力がある」とカグヤ。もしかしたら危険な生き物なのかもしれない...とカグヤが恐ろしくなるソラ。

そんな2人の横を、JAXAに来ていた上木とその部下たちが通り過ぎて行く。「この辺りで間違いないのか」と尋ねる上木に、「ええ、多数目撃者が出ています」と部下。「マリモのような見た目、発光性のある生き物……あの時と同じだ」と呟く上木。そして「見つけ次第捕獲だ」と指示を出し、去って行く。

### 第4話: #JAXAへ

図書館で辞書片手に竹取物語を読むソラ。カグヤに関するヒントが無いのか調べている。館内に国語教師の麻弥を見つけ、声をかけるソラ。「先生、かぐや姫は記憶を消されて月に戻るんですよ。その逆って有り得ます？」と尋ねるソラ。「フィクションだからね」と笑う麻弥。そんな中春が一時的に家に戻って来てカグヤと鉢合わせしてしまうが、恋人だと誤魔化して切り抜けるソラ。春は「今週末打ち上げ実験があるから、みんなでJAXAに見学においで」と言いまた仕事へ戻って

行く。「JAXAに行ってみよう」と言うカグヤだったが、「未確認飛行物体がJAXA訪問したら捕まるでしょ！」と止めるソラ。そして週末、JAXAに向かうソラ。しかし行き電車の車内で、明らかに変装できていないカグヤが。仕方なく2人でJAXAに向かうことに。ロケットの発射実験を目の当たりにして「地球人は本当に凄い！」と大興奮のカグヤ。しかしそんなカグヤを、じっと見つめる1つの視線、それは上木。まるで恋い焦がれるようにカグヤを見つめる上木。「……そっくりだ、あの人に」

## 第5話: #月棲人

打ち上げ実験が終わり、帰ろうとしたところを上木に止められるソラとカグヤ。上木はカグヤに興味津々。出身は？両親は？ハーフ？その緑の腕と髪は？などと質問攻め。上手く誤魔化していたカグヤだが、上木からの「和歌は好きか」という質問について「大好きです」と答えてしまう。「…君、月棲人だな」と上木に腕を掴まれ、動揺したカグヤはその場でマリモになってしまう。ソラは慌ててマリモを腕に抱くと、駆け出して行く。「捕まえろ！」と上木が指示を出し、部下達がソラを追う。騒ぎを聞きつけた春が、事情も分からないままソラ達を助けてくれる。「一体何？何で追われているのよ」と春。ソラは手に抱いたマリモを見せ、これまでの経緯を打ち明ける。春は驚くが、必死になって説明するソラのことを信じてくれた。娘のために黙っていてあげると約束し「その代わりに、今度そのカグヤって子をちゃんと私に紹介すること」「え？」「娘の彼氏、親が気にするのは当然でしょ」と笑う春。「彼氏じゃないけど……」とモゾモゾ。そしてソラ達はJAXAを脱出した。

自宅は上木が部下を既に送り込んでいそうだからと、春に教えてもらった空き家に移動するソラ。そこは大自然の中にあるロッジで、最低限の家具と食料が揃っていた。しばらく2人で過ごすことになったソラとカグヤ。そしてカグヤは「ソラに黙っていたことが2つある」と切り出す。「1つ目。僕は8/31に月へ帰ること。2つ目は…」言いにくそうにするカグヤ。「月に帰る前に、僕と関わった全ての人間から、僕の記憶を消さないといけないこと」

## 第6話: #忘れないで

カグヤとの記憶を消されてしまうと聞いて大きなショックを受けるソラ。「ソラの研究を台無しにしてしまって申し訳ない」と謝るカグヤだったが、「研究なんて…」と放心状態のソラ。「何この感情。なんでこんなに苦しいの？」。そして感情はどんどん悪い方向へ。もし上木がカグヤを捕まえたなら、カグヤは月に帰ることなく、ずっと地球にいてくれるのではないか？と思い始めるソラ。一方JAXAでは春が上木からの尋問を受けていた。「娘さんと一緒にいた男は月棲人。娘さんが危険だ、居場所を教えなさい」しかし春は何の事かとぼける。すると上木は、自分が過去にかぐや姫に会った「帝」であり、竹取物語の作者だと打ち明ける。「かぐや姫との記憶を消さない代わりに、

私は不老不死の薬を飲むことを選んだ。だから私は月棲人に聞きたいのだ。この命を終わらせる方法を」

ロッジでは、思い詰めた表情のソラがカグヤに迫る。「2つから選んで。今この場で私の記憶を消して、私の目の前からいなくなるか。私の記憶を消さずに、JAXAに戻るか」。カグヤはしばらく悩んだのち「いずれ月に帰ると分かっている、今ソラの記憶が消えるのは嫌だ」と言い、JAXAに戻る方を選ぶ。その答えを聞いたソラは、泣き崩れる。「ここにいてよ……今だけは私のこと、忘れないで」そんなソラを優しく抱きしめるカグヤ。

## 第7話: #月が綺麗ですね

カグヤへの想いに気付いたソラ。残された短い時間の中で、精一杯カグヤとの思い出を作ろうとする。消えるのは記憶だけ。それなら『物』でカグヤとの時間を残せばいいのだと、ソラはカメラで撮影したり、ノートに今日あった出来事を書いたりして記録を残していく。しかし2人の思い出を残せば残すほど、これを見ても何も思い出せない未来の自分を想像して、悲しくなるソラ。ある晩、綺麗なお月様が浮かぶ夜空をふたりで見ているカグヤとソラ。そしてカグヤは言う。「最近小説で読んだ。『月が綺麗ですね』は、I love youになるらしい」突然の言葉に、驚くソラ。「たとえ僕を忘れても、将来ソラが月を見て、この瞬間この感情だけは、きっと思い出せる」とカグヤ。2人は宝物のような時間を過ごす。そしてカグヤが月へ帰る前日、2人の時間を引き裂くように、ドンドンと扉を叩く音。敵がやってきたと慌てて隠れるふたり。そして扉を開けて入ってきたのは……。

## 第8話: #逃避行

扉を開けて入ってきたのは、心美と美沙だった。春から状況を聞かされたふたりは、ソラ達を助けに来たのだ。既に街中に上木の部下達による『マリモ捕獲作戦』が始まっており、この場所も時期に見つかるだろうと。心美がスマホを開くと、#マリモを探せというハッシュタグがトレンドに入っていた。すると美紗がホームセンターで購入してきたという、水槽いっぱいマリモを見せる。「私たちがこれで目くらまししてる間に、2人は逃げなさい」美咲はカグヤにウィッグを付けて、女性もの服を着せ変身させる。「絶対似合うと思ったー！」変身したカグヤとソラは心美たちに見送られながら、ロッジから飛び出して行く。カグヤが月に戻るまで、あと2日。

## 第9話: #月へ

カグヤ逃げるカグヤとソラを上木が追い詰める。激しい攻防戦の末、ふたりは上木の部下に取り押さえられて、カグヤだけJAXAに連れて行かれる。カグヤと離ればなれになるソラ。ソラは自分

が普段研究に使っているグッズをリュックに詰めると、カグヤのためにJAXAの研究機関へ侵入する。そして上木を発見すると、丸腰で飛び掛かって行く。しかしそれを仲裁したのは、ソラの母・春だった。そして春は「上木教授、本当は死にたいんじゃない、かぐや姫にもう一度会いたくないじゃないの？」と問いかける。そして春は上木にカグヤを解放するかわりに、交換条件を持ちかける。「カグヤを解放し、あなたは彼と共に月へ帰る」

そんな事できるはずない！と食ってかかる上木に、春は「寝ている間に、生体検査をさせてもらった。あなたの身体にはカグヤや月棲人と同じ細胞がある」驚く上木。そしてカグヤは解放される。「かぐや姫は私の祖母だ。きっと、月であなたを待ってる」カグヤのその言葉を聞いて、涙を流す上木。

## 第10話: #記憶

月に帰る前日。見晴台のベンチで、発射予定のロケットを見ながら言葉を交わすソラとカグヤ。「私決めた。将来宇宙飛行士になって、月に行く」そしてベンチに『月でカグヤと再会する』と油性ペンで落書きするソラ。出発当日、カグヤはマリモになる前に、ふたりはファーストキスを交わし、強く抱きしめ合う。「ソラのこと、絶対忘れない」「カグヤのこと、いつか絶対思い出すから」ソラが顔を上げるとカグヤが泣いていた。それを見て、ソラも涙を流す。こうしてカグヤは月へ戻って行く。

記憶を消されたソラに平凡な毎日が戻ってくる。しかし不思議と古典がスラスラ答えられている自分、やりかけの夏休みの自由研究などから強い違和感を覚えるソラ。「何かを忘れている気がする、絶対に思い出す」と、研究者気質を発揮し、自分が残した証拠を元に記憶を辿ろうとする。そして春と共に、見晴台のベンチでロケット発射を見守るソラは、そこに書かれた『月へ行く、カグヤに会う』のメモを見て、何故か泣いている自分に気付く。

家に戻ると、一枚のノートに小説を書き始めるソラ。『竹取物語、その先のお話』

終わり

夏の月一話

【登場人物】

前園宇宙（ソラ）（14）鹿仙中学校3年生。

カグヤ（？） 月から来た宇宙人。

中松心美（14）ソラのクラスメイト。

前園春（38）ソラの母。JAXA職員。

三宅美沙（29）春の妹。美容師。

笹野修介（35）理科教師。ソラの担任。

持田麻弥（42）国語教師。

前園賢（35）ソラの父。亡くなっている。

上木ステイブン五郎（36）スペースXからJAXAに派遣され

た上席研究員。その正体は昔かぐや姫に会った帝。

○竹藪の中（夜）

月の光が差し込み、ほのかに明るい。

ソラM「私は、理解できなかった」

竹の中にそびえ立つ一本の樹木。

そこに寄りかかって寝ている前園ソラ。

（14）、目を開ける。

ソラM「なぜ私が、ここで眠っていたのか」  
起き上がるソラ。

○公道（夜）

竹藪の中から公道に出てくるソラ。

ソラM「眠る前は、何をしていたのか」

○バス停（夜）

路上に転がる、蟬の死体。

それを見ているソラ。

ソラM「夏休みの間、何をしてたのか」

○バス（夜）

学習塾の前でバスが停まる。

子どもたちが乗ってくる。

座っているソラ、スマホを見る。

「8/31」とホーム画面に表示されている。

ソラM「どうしても夏休みの自由研究に、手をつけていないのか」

○駅前（夜）

駅ホームへ向かうソラ。

駅前の時計は十九時半近くを指している。

ソラM「残り、13時間と24分で、私が満足に足る研究が、仕上がるのか」

○駅ホーム（夜）

電車がホームへ入る。

ソラM「そして私は」

電車の風で揺れるソラの髪。

ソラM「どうしても、理解できなかつた」

○電車（夜）

トンネルを走る電車。

まばらに座っている乗客。

ソラM「どうして私の胸が、こんなにも早く、鼓動しているのか」

ソラの手、ソラの胸に触れている。

ソラM「なぜ涙が止まらないのか」

人目を気にせず号泣しているソラ。

電車がトンネルを抜ける。

窓から見える、輝く満月。

○タイトル「『夏の月』 #「私の自由研究」

○鹿仙中学校・3-A

笹野修介（35）、理科のテストの返却をしている。

笹野「赤点は夏休みも補習あるからな！ 再

テスト受からないと、進級させないぞ」

テストを受け取り席に戻るソラ。テストには100点と書かれている。

ソラ、後ろの席の中松心美（14）に話しかけられる。

心美「お願い教えて、ウチを助けて」

ソラ、振り返り、心美のテストを見ようと  
する。

テストの上に乗せている筆箱をずらすも、  
心美は筆箱をおさえる。

ソラ「一の位から」

筆箱がずれ、「6」の文字が見える。

心美「……」

ソラ「では、十の位も」

筆箱、ズれるも十の位はなかった。6点。

心美「ご指導、お願いします！」

ソラ、顎に手を当てて、考えている様子。

心美「……低すぎて、引いてる？」

ソラ「いいえ。非常に、困っている」

心美「？」

ソラ「自由研究、テーマ見つかってないの」

心美「普通でしょ、まだ七月だよ」

ソラ「案出し、手伝ってくれたら教える」

心美「ウチでいいんだ？」

ソラ「心美の理論を超越した、自由な発想が

必要なの」

心美「バカにしてるでしょ」

### ○公園

ソラ、池の写真をカメラで撮っている。

その傍らのベンチで、心美が座っている。

心美「朝顔の成長日記」

ソラ「幼稚すぎる」

心美「セミがビービー鳴く理由」

ソラ「オスがメスを呼んでるから」

心美「へー、恋してんだ、あんなキモいのに」

ソラ「生殖活動。生物の本能にすぎない」

心美「つままないの……てかその撮影、夏休

みも続けるの？」

ソラ「観察は研究の基本。身の回りの観察から研究の切り口が開かれる。例えば、先週から鯉の泳ぐスピードが上がっている。なぜだろう。とか」

心美「それでいいじゃん」

ソラ「小さくまとまるのは、ナンセンス」

心美、傍に置いてある、チャックが微妙に開いたソラのリュックを見る。  
リュックからソラのテストを取り出す心美。数学は100点。

ソラ「中学生最後の自由研究だよ？ あ！」

ソラ、心美がテストを見ていたことに気づき、奪おうとする。

するとテストはひらりと地面に落ちる。

国語、39点。古典、20点

心美「うちら仲間だ、赤点仲間」

ソラ「私は……古典だけだし」

### ○前園家・寝室

仏壇の写真に前園賢(35)が写っている。

前園春(38)、静かに手を合わせている。

春「……」

ソラの声「ただいまンゴー」

心美の声「お邪魔しマンモスー」

春、よしと息をつき、腰を上げる。

春「おかえりンゴスター」

○同・リビング

広くて北欧風のおしゃれ空間。

ソラはパソコンを操作中。

地学の勉強をしている心美、頬をテーブルにつけ突っ伏している。

心美「月の裏側が見えない理由って何？」

ソラ「まず月は、 $\infty$ 万キロ離れた地球のまわりを、約 $\infty$ 日で一周しているのね。

月は回りながら、回ってるの」

心美「ごめん、ギブかも」

そこに春がスーツケースを持ってくる。

心美「ソラママ、行くんですか」

春「うん、そろそろ」

春、棚にある透明の小物入れから、ビー玉を2つ取り、テーブルに置く。

春、一つを中央に置き地球に見立て、もう一つの半円緑で半円透明のビー玉を月に見立て動かしながら説明する。

春「月自体も回るし、地球の周りも回る。だ

から、こういう風に」

心美「ほんとだ。ずっと見えない。流石 JAXA

職員」

ソラは心美と春を無視し、顎に手を当て、  
パソコンに険しい顔を向けている。

心美「ソラ、お母さん JAXA に出張するの、寂  
しいんだ」

ソラ「……違うし。自由研究のテーマ考えて  
るだけ」

春「相変わらず研究好きねえ。感心感心。  
パパにそっくり」

心美「ソラパパって、ロケット開発者だった  
んですよね？」

春「そう。またの名を研究オタク」

心美「ソラじゃん」

春、ん？とリュックからソラの古典の解  
答用紙を取り出す。

春「こつちがサッパリなのも同じ」

ソラ「……古典なんか、なんの役に立つの？  
理解に苦しむこと、多すぎだし」

春「例えば？」

ソラ「誰かが誰かに、恋愛感情を抱く。歌を作ったり、楽器を演奏したりする。……

昔の人は、頭がおかしい」

春「恋って、そういうものよ」

ソラ「そういうものってどういうもの？」

春「ソラもいつか分かる日がー」

ソラ「……（首をかしげる）」

春「しばらく来ないか。じゃ、行くわ」

ソラは立ち上がり、春を見る。

ソラ「……ロケットの発射日、決まったら教

えて」

春「おーけい。一番初めにソラに教える」

スーツケースを引いて出発する春。

○同・屋上（夜）

光っている月が見える。

ソラ、望遠鏡を見ながら、「天体観察ノ

ート」に星座を記録している。

ソラが望遠鏡を覗くと、緑の光が見える。

ソラ「！」

ソラ、目を離し、肉眼で空を見る。  
キラリと光る、緑色の流れ星。

その破片らしきものが、近くの竹藪に墜ちてゆく。置いてあったバックパックを背負うと、駆け出すソラ。

○竹藪の中（夜）

バックパックを背負ったソラ、ライトを点けながら早歩きしている。

すると緑色の光を発見。

ソラ、ライトを消し、ゆっくりと歩く。

ソラ「！」

折れた竹の筒部分に、すっぽりとハマっている、マリモのような緑の球体。

ソラ、興奮気味にブツブツと独り言。

ソラ「なんだこれ……緑色の光を放っている……てことはつまり、放射性物質の可能性があるな。そんな時は」

ソラ、リュックから『JAXA』のマークが

ついた防寒用断熱シートを取り出し、身につける。

ソラ「完璧」

ソラ、スマホで写真を撮ると、虫かごとトングを取り出し、球体を採集する。

○前園家・ソラの部屋（夜）

科学本やJAXAのポスターなどが所狭しと置いてある、科学少女の部屋。

アルミホイルの上に置かれた緑の球体。その隣でソラ、パソコンでマリモの写真調べている。

ソラ「マリモにしか見えないが：当然マリモではない。竜巻に巻き上げられたマリモが空から降ってきた？それともマリモの変種？新種？調査が必要だな」

× × ×

ソラ、眠い目を擦りながら顕微鏡で緑の球体を観察し、ノートにスケッチする。

ソラ「もしかして……世紀の大発見」

× × ×

朝の陽の光がソラを差ししている。

ソラ、目を覚ます。

緑の球体が消えている。

ソラ「うそ」

○前園家・各所

冷蔵庫を開けるソラ。

ソラ「どこにいるの？」

球体はいない。

× × ×

引き出しを開けるソラ。

分厚い本や図鑑が入っている。

× × ×

トイレの蓋を開けるソラ。

球体はいない。

○前園家・リビング

家中探し回った後の、散らかった部屋。

そこに突っ伏しているソラ。

ソラ「どこに消えたんだよ……」

心美からメール「補習、行かないと留年するよ」

ソラ「……げ！」

ソラ、立ち上がり、リュックを背負って玄関へ行く。

高いところから落ちてきて、着地する男が、窓から見える。しかし急いでるソラはそれに気付かない。

### ○公園

歩くソラ、止まり、池を見る。

ソラ「あれ？」

池には、鯉がない。

ソラ「どこ行った？」

### ○公園の違う場所

三宅美沙（29）、犬の散歩中。

犬、池の向こうの方に行こうとする。

美沙「？」

池の向こう。

鯉が集まって陸地の方を見ている。

陸地では、髪の毛と右腕が緑で全裸の美男子・カグヤ（？）が、あぐらを組んで、セミを見つめている。

カグヤを見て、ぎよつとする美沙。

犬に話しかける。

美沙「何あのファンキーなイケメン。ってかちゃんと履いてる……よね？」

#### ○鹿仙中学校・教室

持田麻弥（さ）が補習を行なっている。

題材は「竹取物語」。

補習を受けているソラ、隠れてスマホで緑の球体の写真を見ている。

#### ○前園家・玄関リビング

ソラ、帰宅してリビングに向かおうとするも止まる。

物音が二階から聞こえる。

○同・階段／二階廊下

ソラ、フライパンを持ってゆっくりと二階へ上がる。

自分の部屋をチラ見するソラ。

誰もいない。

母親・春の部屋をチラ見するソラ。誰もいない。

ソラ、気のせいか、とフライパンを降ろしたところ、屋上への階段から、カグヤが降りてくる。全裸で食べかけのりんごを手にしていて、それがちようど股間を隠している。

ソラ「ぎゃああああ！！」

すっ転ぶソラ、立ち上がり、廊下の奥に逃げる。ソラ、フライパンを構え、

ソラ「なんでもあげます！」

ソラをじっと見つめるカグヤ。

ソラ「銀行のカード、そのの……棚に」

カグヤ、開いたソラの部屋から顕微鏡を

掴み、不思議そうに眺める。

ソラ「それだけはダメ！」

カグヤ、顕微鏡を置く。

ソラ「（少しホッとする）」

カグヤ、廊下に置いてある望遠鏡を手に取り、不思議そうに眺める。

ソラ「それもダメ！」

カグヤ、望遠鏡を置く。

カグヤ、ソラにゆっくりと近づく。

ソラ「お母さん……（泣く）」

カグヤ、ソラが泣いていることに気付くと、その場で座る。

カグヤ「%※#（謎の言語）」

ソラ「……え？」

カグヤ、リンゴを手で握りつぶす。

ソラ「（びびる）！」

カグヤ、りんごの一部をソラに差し出す。

ソラ「……」

カグヤ「%※#%（謎の言語）」

ソラ「……あ！」

ソラ、向こうに指を差し、カグヤはそ  
ちを向く。

その隙にソラ、カグヤの横をダッシュで  
通る。

階段を駆け降りるソラ。

ソラ「！」

ソラの足、踏み外している。

ふわりと宙に浮く、ソラの身体。

カグヤ「！」

カグヤ、階段の壁を走る。

ソラの身体を空中で抱きとめ、そのまま  
一緒に落下。

カグヤの身体が下になって床に叩きつけ  
られる。

ソラ・カグヤ「……」

カグヤ、ソラを自分の上から降ろす。

逃げようとするソラだが、止まり、カグ  
ヤを振り返る。

背中を痛がっているカグヤ。

ソラ「……守ってくれたの？」

カグヤ「……# \$（謎の言語）」

ソラ、慌てて湿布を取って、戻ってくる。  
カグヤから距離を保って投げるソラ。

カグヤ、それを取るも、使い方がよくわからない様子。

ソラ「テープ、はがして」

カグヤ「……（言われても分からず）」

ソラ、カグヤに近づき、カグヤの背中に湿布を貼る。

そしてソラ、またカグヤからすぐ離れる。  
カグヤ、背中を触って、湿布を不思議に思っている様子。

カグヤ、先ほど潰したりんごを発見。

カグヤと共に床に落ちていたのだ。

カグヤ、潰したリンゴをさらに二つに割り、片方をソラに差し出す。

ソラ「……」

ソラ、カグヤにゆっくりと近づき、そつと受け取る。

カグヤ、にっこりして、リンゴを食べる。

ソラ、口に入れようとするが、止まる。

ソラ「服着て！」

○同・リビング

スウェットを着ているカグヤ、椅子に姿勢正しく座っている。

離れたところに立っているソラ。

ソラ「悪意がないのは、分かりました……。で、あなたは何者で、どこから来たんですか？  
なんでその……全裸なんですかね」

カグヤ、理解できていない様子。

ソラ「キャンユースピークイングリッシュ？」

カグヤ「……」

カグヤ、棚の上が気になっている様子。

ソラ「……」

ソラ、固定電話の受話器を取り、110の番号を押す。

ソラ、隣を見るとカグヤが立っている。

ソラ、驚いて退く。

ソラ「ななな何ですか！ 離れて！」

カグヤ、ソラに緑色のビー玉を見せる。

ソラ「……」

カグヤ、ビー玉を指差した後、自分を指  
差す。

ソラ「あ……昨日の……」

× × × (ソラのイメージ)

地球に向かって緑の光が通過する。

それは竹藪に落下。

竹藪の中で光を放つ緑の球体

× × ×

カグヤの持つ、緑のビー玉。

ソラ「ちよつと待って！」

ソラ、二階へ駆け上がる。

カグヤ「……」

すぐ降りてくるソラ、天体が描かれたポ  
スターを持ってくる。

ソラ「つまりあなた、宇宙から来たの!？」

ソラ、ポスターの図と、地面を指す。

ソラ「ここ! これ! 地球!」

カグヤもソラと同じ場所を指す。

カグヤ、あっとソラを見る。

ソラ「分かった！？（カグヤを指差し）あ  
あなたは？」

カグヤ、ポスターの月と、自分を指差す。

ソラ「月！？」

ソラ、月を指差す。

ソラ「月から来たんだ。ちよっと待って！」

またソラ、二階へ駆ける。

カグヤ「……」

カグヤ、椅子に座る。

ソラ、ノートとカメラを持ってすぐ戻る。

ソラ、カメラでカグヤを撮る。

カグヤ「！？」

カメラ音にビビったカグヤ、椅子と共に  
倒れてしまう。

ソラ「宇宙人さん」

ソラ、カグヤを見下ろす形で立ち、ニコ  
ニコ笑顔で話しかける。

ソラ「私、あなたを、研究し尽くしたい」  
よく分かっている様子のカグヤ。

## ○ノート表紙

表紙の文字「THE RESEARCH OF THE MOON

ALLEN」とある。

「CONFIDENTIAL」と赤字で書き加えられる。

## ○前園家・リビング

カグヤ、体温計を白衣姿のソラに渡す。

ソラ「なるほど」

ソラ、ノートに「恒温動物」と書き足す。

× × ×

フライパンで調理しているソラ。

肉、魚、野菜など、さまざまな食材の料理が置いてある。

どれも手で掴み、食べているカグヤ。

× × ×

食後で眠そうなカグヤ、座ってうとうとしている。

ソラ、ノートに「雑食」と書き足す。

ソラ「人間みたいね」

すると、発光する。

ソラ「！」

ソラ、気付くとカグヤが消えていた。

ソラ、椅子の座面を見ると、カグヤが緑の球体の姿になっていた。

ソラ「（興奮）ほおおお！……前言撤回」

ソラ、ノートに「肉体は形状変化可能」と書く。

○同・庭（朝）

カグヤ、庭であぐらを組んで、睡蓮の花を見ている。

隣に来るソラ。

ソラ「何してるの」

カグヤ、睡蓮の花を指差して、考えながら言葉を発する。

カグヤ「お……かし」

ソラ「ん？ ん？」

カグヤ「おか……し」

ソラ「お菓子？」

カグヤ「お、か、し」

ソラ「これは、食べられません」

カグヤ、睡蓮に意識を戻し、薄く笑みを浮かべる。

ソラ「……」

× × ×

ソラ、ノートに、「自然からもエネルギーを得ている？」と書く。

### ○公園

ノートを持ち、カメラを首にさげたソラ、カグヤを動画撮影中。

カグヤ、花を優しく触る。  
するとソラ、池の音に気付く。

大量の鯉、カグヤの方を向いて口をパクパクさせている。

ソラ「……繋がった」

× × ×

ノート、「鯉の活性化」と「月星人」の文字が、矢印で結ばれる。

○前園家・リビング

ソラ、パソコンで春とリモートで話している。

ソラ「プロジェクト、どう？」

春「順調。見る？」

ソラ「いいの！？」

春「国家機密よ」

パソコン画面、宇宙ロケットが映る。

ソラ「すごい！ 大きい！」

春「ソラはどう？」

ソラ「あ、研究テーマ決まった」

春「どんな分野？」

ソラ「うーんとね」

春「地学？ 生物？ それとも物理？」

ソラ「言わない」

春「言いなさいよ」

ソラ「こっちは地球規模のトップシークレッツ

ト扱ってるから」

春「また変なこと始めたんじゃないの」

するとカグヤ、二階から降りてくる。

カグヤ、ソラのパソコンが気になり、カメラの画角に入ろうとする。

ソラ、カグヤが映らないように自分の体でガードする。

春「あ、そうだ、今度美沙くるから、よろしくね。美味しいマンゴー、持ってきてくれるって」

ソラ、画面をオフにする。

ソラ「分かった！」

× × ×

カグヤ、座っている。

ソラ、研究ノートを書きながら話す。

ソラ「映っちゃダメ。お母さん、JAXAなの。」

JAXAってプロの研究機関なの。あなたの存在が知られたらどうなると思う？ 女子中  
学生のアマチュア研究者から、研究対象は  
取り上げられちゃうの」

カグヤ「……（意味が分かっていない）」  
するとインターホンが鳴る。

## ○同・外

ソラ、出てくると、心美がいる。

ソラ「ごめん心美、今忙しくて」

心美「補習は？ 先生めっちゃオコだったよ」

ソラ「……」

心美「マジで進級できないよ。いいの？」

## ○鹿仙中学・面談室

ソラ、笹野と麻弥に指導されている。

笹野「な、なんて？」

ソラ「補習に行けないのは、地球の歴史を一

変させる研究をしているからです」

笹野「研究って、なんだ」

ソラ「言えません。そう易々と他人には。な

んせ、地球の歴史を一変させるので」

笹野「だから、さっきからなんなんだそれは」

麻弥「今の子で、熱をもってやりたいことが

あるっていうのは、素晴らしいことと思え

ますよ？ 私は」

笹野「持田先生」

麻弥「これまでの欠席は、多めに見てあげて、テスト六割で、クリア、ということにしませんか」

笹野「……担任としては甘やかしたくはないが、持田先生に免じて……2学期はしっかりとやるんだぞ」

笹野、麻弥、話が終わり、立ち上がる。

ソラ「あの」

笹野・麻弥「（止まり）？」

ソラ「四割にして欲しいです」

○同・カフェテリア

ソラ、昼食を食べている。

心美、スマホを見ている。

心美「やばいじゃんそれ」

ソラ「明日から補習の後、一緒に勉強しよ？」

心美「ごめん！ 西中の河合くんと、明明後

日、デートできることになって」

ソラ「デート？」

心美「明日美容院行ってー、明後日服買うの」

心美、ソラにスマホの画面を見せる。

アパレルのサイト。

心美「ねえねえ、どっちが良い？」

ソラ「ストップ。心美も進級、危ないはず」

心美「……まあ、なんとかする」

ソラ「勉強する方が、心美のメリットは大きい。合理的に考えて」

心美「……考えて、らんなくない？　こういう時ってさ」

ソラ「なぜ」

心美「ソラにはまだ早いから」

ソラ「心美、馬鹿にしてるね」

### ○同・教室

麻弥の補習を受けているソラ。

ソラ、頬杖ついてぼーっと聞いている。

麻弥「はい前園さん。次の文章」

ソラ「（辿々しく）をかききことにもあるかな。もつともえ知らざりつる」

麻弥「この、をかしき事ってどういう意味か分かる？」

ソラ「……面白い、こと」

麻弥「正解」

ソラ「あつてた」

麻弥「でもこのおかしという言葉には、他にも意味があります」

ソラ「……」

麻弥「例えば、綺麗。おかしき髪は、綺麗な髪、というわけです」

ソラ「……（眩き）おかし」

麻弥「他にも、趣があるという意味もあります。季節の自然を見て感動した時に使います」

ソラ「……」

× × ×（ソラのフラッシュユ）

前園家の庭の睡蓮の花。

× × ×

ソラ、手を挙げている。

麻弥「はい」

ソラ「例えば、お花を見たときに、おかし、  
は使いますか？」

○道

走るソラ。

ソラ「おかし！ おかし！」

○前園家・リビング

ソラ、カグヤに古典の教科書を見せる。

カグヤ受け取り、開く。

カグヤ、急に立ち上がる。

ソラ「……」

カグヤ「いまは、むかし」

ソラ「そう、合ってる」

カグヤ「たけとりのおきなといふもの、あり  
けり」

ソラ「……そう！ すごい！」

カグヤ、ページをぱらぱらとめくり、凝  
視している。

カグヤ「……かぐや」

ソラ「かぐや姫、分かるの!？」

カグヤ、自分を指差す。

カグヤ「カグヤ」

○同・ソラの部屋

ソラ、パソコンでサイトを開いている。

古語の欄と現代語の欄がある。

ソラ「おかし」

ソラ、そう言うと、パソコンが音声を認

識し、現代語の欄に「趣がある」と出る。

ソラ「よし」

ソラ、カグヤの方を向き直る。

ソラ「かぐや姫のこと、知ってるの？」

カグヤ、パソコンを見る。

カグヤ「わがいちもん」

ソラ、パソコンを見る。

ソラ「家族」

カグヤ「おみな」

ソラ、パソコンを見る。

ソラ「おばあちゃん!？」

カグヤ「ぶんぶつを、広めき」

パソコン画面、「文化を広めた」と出る。

ソラ「文化を、広めた」

窓の外を見るカグヤ。

### ○宇宙の映像

光る月。

ソラの声「僕たち月の王族は、その文化を学ぶことが、義務付けられている」

### ○宇宙船

窓から宇宙が見える小さい乗り物。

緑の球体状態のカグヤ、無重力の船内を  
ぼんぼんとバウンドしている。

ソラの声「一人前の指導者になるために、地球に異文化研究をしに行くことが、僕の課題になった」

### ○宇宙

透明なカプセルに入った球体状態のカグ

ヤが宇宙船からポンつと出てくる。

ソラの声「ちなみに、名前はカグヤ」

○前園家・ソラの部屋

パソコン画面を読むソラ。

ソラ「カグヤと、呼んで欲しい」

カグヤ、頷く。

ソラ「カグヤね。私、ソラ」

カグヤ「ソ……ソラ」

ソラ「そう、ソラ」

カグヤ「ソラ」

ソラ「そう！ ソラ！」

×

×

×

ソラ、研究ノートに書き込んでいる。

カグヤ、パソコンと新聞、辞書、国語の教科書などを置き、見ている。国語の勉強をしているのだ。

○同・リビング（日替わり）

ソラ、カグヤ、パスタを食べている。

ソラ、カグヤに指さしをしながら単語を  
教えている。

ソラ「 Pasta 」

カグヤ「 Pasta 」

ソラ「 スープ 」

カグヤ「 スープ 」

カグヤ、スープを飲む。

カグヤ「（スープを指差し） うまし 」

○同・ソラの部屋（日替わり）

カグヤ、勉強している。

ソラ、カグヤを見ながらノートに書いて

いる。カグヤのスケッチだ。

× × ×

ノートによだれを垂らして寝ているソラ。

カグヤは勉強しているが、眠そうであと

うと。

カグヤ、発光して、緑の球体状態に戻る。

穏やかな陽の光が二人をさす。

× × ×

夜になっている。

スマホが鳴り、ソラ、起きる。

カグヤはいない。

スマホ画面、「お母さん」の文字。

ソラ、応答する。

春の声「ソラ！！」

叫ばれたソラ、思わずスマホを離す。

春の声「先生から、補習に来てないって聞いたけど」

ソラ「……はい」

ソラ、よだれで自分が書いたスケッチが汚れていることに気づき、ティッシュを取り出す。

春の声「得意なことをするにはね、苦手なこともしないといけないの。お母さんも昔そうだった。優秀な科学者開発者は、全員が通ってきた道」

ソラ、ティッシュでノートを拭く。

ソラ「……はい」

春の声「もし進級できなかつたら、誕生日に

あげた望遠鏡、没収します」

ソラ「……え待って」

春の声「凶鑑もポスターもビールカーも顕微鏡

も、全て没収。燃やします」

ソラ「……燃やすって」

春の声「お母さんは、本気です」

### ○同・屋上

月を見ているカグヤ。

ソラ、来る。

カグヤ「昼間に寝てしまった。今夜は寝れそうにないな」

ソラ「カグヤ、日本語、上達早すぎる。まだ二日なのに」

カグヤ「地球人は脳細胞の使い方が雑なんだ。もつと有効利用できるのに」

ソラ「私月で産まれたかった」

カグヤ「しかし地球にだって、素晴らしい文化があると聞いている。歌や、物語が」

ソラ「私の好きな、分野じゃない」

カグヤ「（夜空を見て）……あれが僕の星か」

ソラ「昔の人、月を見ても、おかしと思つて  
そう」

カグヤ「僕は今思う。月、いとおかし」

ソラ「いとつて、どういう意味？」

カグヤ「いとは、とても、すごくなど、程度  
を表す意味」

ソラ「なるほど……」

カグヤ「僕今、良くない日本語を使用した？」

ソラ「来て」

○同・ソラの部屋（夜）

ソラ、カグヤに古典の教科書を見せる。

カグヤ「僕が、君に？」

ソラ「お願いカグヤ、絶体絶命なの」

カグヤ「ぜつたい、ぜつめい」

ソラ「私、勉強しないと……生命に危機が訪  
れるの」

カグヤ「それは大変だ」

ソラ「大変なの」

カグヤ「僕にできることなら、なんでもしよ  
う。……そのかわり」

ソラ「？」

カグヤ「僕も地球人を研究したい」

× × ×

カグヤ、ソラに古典を教えている。

ソラ、ノートに書いて単語を覚えている  
様子。

ソラ「ここはどういうこと？ あるいは笛を  
吹き、あるいは歌をうたひ、のところ」

カグヤ「かぐや姫に恋をした当時の貴族が、  
恋の気持ちから、楽器を演奏したり、歌を  
歌ったんだ」

ソラ「それは、理解可能」

カグヤ「どこが分からないの？」

ソラ「大きな音を出して、かぐや姫に自分の  
居場所を知らせたかった？ セミみたいに」

カグヤ「違うよ」

ソラ「じゃあどうして？」

カグヤ「言葉で分からない感情の湧き上がり

が、彼らをそうさせた」

ソラ「感情の湧き上がり」

カグヤ「感情に理由はない。想いを伝えたい、

吐き出したい。体が先に反応するんだ」

ソラ「例えば」

カグヤ「胸の鼓動が激しくなったり、涙が流れたり」

ソラ「理屈で理解できない」

カグヤ「だからこそ、魅力的なのさ」

ソラ「いいえ。魅力的なものっていうのはね、

理屈がはつきりしているものなの」

カグヤ「君には感受性が足りないかも」

ソラ「人間みたいなこと言わないで。宇宙人のくせに」

カグヤ「僕らの方が、人間より情緒がないとは限らない」

ソラ「……飛ばす。恋愛に関する部分は」

○同・リビング（庭）（朝）（日替わり）

雨が降っている。

二階から降りてきたソラ、カグヤが庭で  
うずくまっていることに気づく。

ソラ「カグヤ？」

ソラ、カグヤの隣に座る。

カグヤ、泣いている。

ソラ「……具合、悪いの？」

カグヤ「違う」

カグヤ、指差す。

その先、枯れた睡蓮の花。

ソラ「……お花が、どうしたの？」

カグヤ「枯れた？」

ソラ「枯れて、どうしたの？」

カグヤ「悲しい」

ソラ「お花を売ってる場所に行けば、代わり  
があるよ」

カグヤ「それでもこの花は、戻らない」

ソラ「……花はいつか枯れる。形あるものは

いつか必ず滅びる。それが宇宙の基本原理」

カグヤ「それは知ってる。でも僕は、枯れた  
ことが悲しいんじゃない。花と過ごす時間

が終わってしまったことが悲しいんだ」

ソラ「……どういう意味？」

カグヤ「時間は常に流れ続け、全てのものを一箇所にとどめておいてはくれない。いつまでも一緒にと願っても宇宙はそれを許してくれない。だから心が大事なんだ。一緒にいられた時間を、その一瞬を、心はとどめておくことができるから」

ソラ「……カグヤの言ってること、よく分かんない」

カグヤ「それに、悲しいと感じるのは、その花を愛していたから」

ソラ「合理的に考えて、数ヶ月で消えてしまふものを好きにならない方が、人間の精神には、良いよ」

カグヤ「逆だよ。一瞬で消えてしまふものに対してさえ愛を注ぐことができるから、人間は芸術を生み出し、刹那を愛しく感じるんだ」

ソラ「……」

○鹿仙中学・教室

古典のテストを受けているソラ。

○同・廊下

ソラ、心美、歩いている。

心美「イエーイ！　うちら、やったね」

ソラ「心美、どうやって勉強したの？」

心美「大和にマンツーマンで教えてもらった」

ソラ「大和」

心美「あ、西中の河合くんのこと。ソラは？」

心美、ソラの手にあるテスト用紙を見

る。70点だ。

心美「点数取れてるじゃん！」

ソラ「問いに答えるだけなら簡単。だけどそ

の答えが腑に落ちるかどうかって言ったら、

ぜんぜん理解不能だった」

心美「急に哲学モード？でもよかった。明日

からが本当の夏休みか」

ソラ「うん」

心美「？（元気がないソラを少し気に掛け）」

○道

傘をさし歩いているソラ、心美。

ソラ、道をそれる。

心美「あれ？」

ソラ「ごめん、よるところがある」

心美「？」

○花屋

ソラ、花屋の店員に話しかけている様子。

睡蓮の花の商品を手取るソラ。

○前園家・庭

カグヤ、ぼーっと庭を眺めている。

するとソラが来る。

ソラ「ただいま」

ソラ、袋から睡蓮の花の植木鉢を出す。

ソラ、カグヤに渡す。

花にわあっと表情を輝かせるカグヤ。

カグヤ「これ、僕に？」

ソラ「そう」

カグヤ、受け取り、庭に置く。

そしてカグヤ、ソラをゆっくりとハグ。

ソラ「！」

カグヤ「ありがとう」

ソラ、離そうとするが、離れない。

カグヤ「本当に、ありがとう」

ソラ「……痛い」

強くハグしていたカグヤ、離れる。

カグヤ「申し訳ない！ 湿布は必要か？」

ソラ「いらない」

カグヤ「深く、感謝する」

ソラ「代わりの花は意味ないんじゃないの？」

カグヤ「だって僕のためにくれたんだろう？」

この花はソラが買ってきてくれた。ソラの

気持ちがこの花を包んでる。それが嬉しい」

ソラ「言ってること、矛盾してる」

カグヤ「ソラのその気持ちだけで、僕は嬉し

いんだ」

ソラ「……」

○同・ソラの部屋（夜）

球体状態のカグヤが机上にある。

研究ノートを書いているソラ、カグヤを見る。ソラ、カグヤをつつく。

ソラ「悲しかったり、嬉しかったり……理解に、苦しむ」

ソラのスマホに着信。

スマホ画面には「心美」とある。

○河川敷（夜）

ソラと心美が座っている。

心美「気を悪くさせてたら、嫌だなと思って」

ソラ「何が？」

心美「ウチから勉強したって言ったのに、デート優先させたでしょ？」

ソラ「……ああ」

心美「今日、いつもより、元気なかったし」

ソラ「全く、気にしていない」

心美「ほんと？」

ソラ「本当」

ソラ、立ち上がって、高架下の花の傍に座る。

心美、ソラを追う。

ソラ「今日、人生で初めて、お花を買ったの」

心美「お花？」

ソラ「うん。プレゼント用に」

心美「……誰に！？」

ソラ「……よく、分からない存在」

心美「男の人？」

ソラ「男というより……オス」

心美「男の人じゃん！」

ソラ「今私は、非常に、困っている」

ニヤニヤしている心美。

ソラ「その存在の行動、言葉、謎が多すぎる。

研究しがいは、あるけど」

心美「おめでどう」

ソラ「？」

心美「恋だ。初めて、好きな人ができたんだ」

ソラ「いいえ。それは違う」

心美「恋をしたことがないのに、どうして違  
うって分かるの？」

ソラ「……」

心美「はい、論破」

ソラ「……歌を詠んだり、楽器を演奏したり  
は、しない」

心美「それは昔の話。あのね。恋をするとと  
たんに相手のすべてが≧?≧になるんだよ」

ソラ「ハテナ? どういうこと？」

心美「いま何を考えてる? 何を見てる？」

なぜ笑ってるの? 友達とどんな会話して  
るの? 今日なに食べたの? あたしのこ  
とどう思ってる? こんなこと聞いちゃう  
あたしのこと重い? って、どんどん≧?≧  
ばかり増えていく」

ソラ「私はただ……知らないことを、知りた  
いだけなんだけど」

立ち上がるソラ、帰ろうとする。

ソラ「理解できないことを、理解したいだけ」

○前園家・玄関（日替わり）（朝）

美沙がいる。

美沙「ソラー？ 久しぶりー」

インターホンを押す美沙、反応はない。

○同・ソラの部屋（朝）

寝ているソラ。

○同・庭（朝）

カグヤ、庭でソラからもらった睡蓮の花  
を見ている。

美沙の声「すみませーん」

カグヤ、美沙が外から見ていることに気  
づく。

○同・リビング（朝）

マンゴーを食べているカグヤと美沙。

美沙「ソラとは、何歳離れてるの？」

カグヤ「……三歳、くらいだ」

美沙「くらい？」

カグヤ「いや、三歳だ。そして妹は疲れている。昨日遅くに帰ってきたようだから」

美沙「ふーん。優しいお兄ちゃんね」

カグヤ「ありがとう。君は、ソラの学校の友人か？」

美沙「そんな若く見える？」

カグヤ「先生か」

美沙「叔母さん」

カグヤ「家族」

美沙「そう。だからあなたがお兄ちゃんじゃないことも、分かる」

カグヤ「……」

カグヤ、立って頭を下げる。

カグヤ「申し訳ない。誰かに会ったら兄だと偽れ。そう命ぜられて」

美沙「全然許す。格好いいから」

カグヤ「良かった。ありがとう」

美沙「ソラとは付き合ってどれくらいなの？」  
カグヤ「付き合っていない」

美沙「いいから。本当のこと言いなさい」

カグヤ「本当のこと」

美沙「怒らないから」

カグヤ「……僕は、月から来たんだ」

○同・ソラの部屋（朝）

寝返りを打っているソラ。

○同・リビング（朝）

向き合っている、カグヤと美沙。

美沙「かぐや姫の末裔ねえ」

カグヤ「あまり、言わないでくれ。ソラが嫌

がる」

美沙「でも、それはあり得ないな。竹取物語、

ちゃんと読んだ？」

カグヤ「ああ、読んだ」

美沙「かぐや姫は、記憶を消されて月に帰る

わけだから、あなたが地球の文化を知って

いるわけがないの」

カグヤ「その通り。竹取物語には、嘘がある」

美沙「……」

カグヤ「天の羽衣を着る。その時消えるのは、  
我々の記憶ではない」

美沙「誰？」

カグヤ「この星の人々の、僕に関する記憶。  
僕と出会った記憶、僕がいたという証拠、  
全てが消える」

美沙「じゃあカグヤ君のこと、私たちは、い  
つ忘れるの？」

カグヤ「この星の暦だと……八月三十一日。  
僕が、月へ帰る日」

美沙「……（笑う）」

カグヤ「何がおかしい」

美沙「私、あなたを見たことがある。公園で。  
多分、映画の撮影中かな」

カグヤ「撮影？」

美沙「そういう役作りなんですよ？ でもそ  
の映画、絶対当たらなそう」

美沙、立って自分とカグヤの分の食器を  
洗い場に持っていく。

美沙「今の時代、格好いいだけじゃ売れないよ？　しないとだ、演技の練習」

カグヤ「……そういうわけでは」

美沙「あ」

美沙、名刺入れを取り出し、名刺をカグヤに渡す。ヘアサロンの名刺。

美沙「撮影終わったら、黒に戻しにおいで」

カグヤ、受け取る。

美沙「姪っ子の恋人割り、適用してあげる」

カグヤ「だから、恋人では……」

階段を降りる音。

カグヤ「（それに反応して）！」

ソラ、降りてきて、カグヤと美沙がいることに気がつく。

美沙「久しぶり〜」

ソラ「……おばさん」

### ○種子島空港

一台のオスプレイが着陸。

中から黒スーツの上木ステイブン五郎

(35) が降り立つ。

春「お待ちしておりました。上木教授」

上木「……飛来物の資料は」

春「はい、こちらに」

春、手元の資料を渡す。風が強く、紙がはためいてよく読めない。

しかし一瞬だけ、宇宙から飛来する物体

(カグヤ)の衛星写真が見える。

(一話 終わり)